半田山物語

植物園50年のあゆみ

上　産声

木々の成長ぶりに歴史

標高約50㍍の山肌に直径20㍍、高さ1・5㍍ほどの平べったい円柱が三つ並ぶ。縁は赤茶色のれんがで覆われ、しゃれた花壇を思わせる。

半田山植物園（岡山市北区法界院）の中心部。円柱の正体は、近くの三野浄水場からくみ上げた水をためる配水池の屋根部分だ。配水池は半田山の高低差を利用し、市中心部に安全な水を提供している。

同植物園は、配水池周辺を緑化し、市民の憩いの場とする目的で市水道局が1953（昭和28）年、整備に着手。当時、局幹部で後に市長となる岡崎平夫氏らが推進した。

水道局職員として翌54年から事業に携わり、後年、初代園長に就いた富山岩雄さん(82)＝東区益野町＝によると、整備のための予算は少なく、職員がシャベルやくわを手に工事を進めた。

「植物園が本当にできるのか不安な思いもあったが、無我夢中で作業した」と富山さん。園の入り口から配水池手前まで続く延長約100㍍の石段は、そのころに手掛けたものだ。

開園から間もないころの半田山植物園＝1966年

収集が課題

「大そらえ　はえあふ木々の　三千種」

配水池の北にある展望台の近くには、市議会で水道委員長を務めた片山菅巳雄氏の句碑が立っている。片山氏は岡崎氏とともに、植物園の整備構想を推し進めた人物。句に詠まれたように園内の植物は現在、3200種、15万本に達している。

半田山はもともとアカマツやクスノキ、ササなど約200種類の植物が自生していたが、当然のことながら植物園としては不十分。開園に向け、植物の収集が重大な課題だった。

転機となったのは55年。開園に先立ち、日本植物園協会の正会員となり、全国の植物園から種子や苗を譲り受けたり、栽培方法の情報を聞いたりするようになった。園内の植物目録である「園報」の第1号を発行した62年には約2千種、2年後の開園時には3千種を超えた。

盛大に開園

同植物園は64年5月25日、一般開放が始まった。

開園当時から近くで暮らす竹内巌さん(81)＝北区北方＝によると、そのころは自生していた樹木以外はまだ若木。今は頭上を覆うほどに成長した東斜面のツバキも大人の背丈をわずかに超える程度だったという。

「木々の成長ぶりが50年の歩みを感じさせる」。竹内さんはしみじみと話す。

◇

半田山植物園が25日、開園50周年の節目を迎える。市街地近くにあり、市民に親しまれてきた同園の歩みを振り返る。

その日、日本植物園協会や県、市の関係者ら約400人が訪れ、開園式が盛大に行われた。

半田山物語

植物園50年のあゆみ

中奮闘

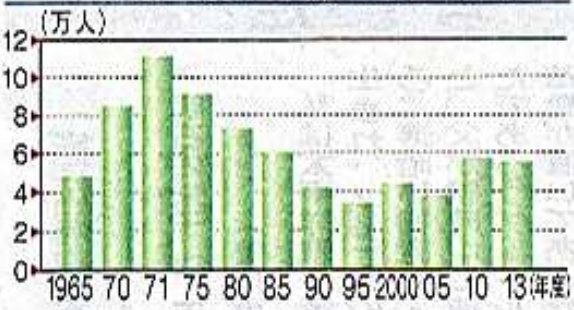
魅力アップへ知恵絞る

赤、白、ピンク…。色とりどりのバラが咲き誇る半田山植物園（岡山市北区法界院）。約250種、千株が植えられており、例年4月下旬に咲き始め、6月いっぱい楽しめる。

4月の桜と合わせ、園内が最も輝きを見せる時季であり、年間5万5193人（2013年度）の来園者のほぼ半数が4、5月に訪れる。

同園は1964（昭和39）年の開園後、入園者数がほぼ右肩上がりで推移した。71年度には11万1115人を記録。しかし、75年度には前年度から約1万3千人落ち込み、10万人を割り込んだ。

半田山植物園の入園者数の推移



▲れんがの壁から「カスケード」の水が滝のように流れ落ちる半田山植物園のバラ園

当時、園を管理していたのは市水道局。市水道百年史によると、74年にRSKバラ園（北区撫川）がオープンしたことなどが要因として考えられるという。

新聞を〝創刊〟

B4判、74ページの冊子がある。市水道局が87年にまとめた「半田山レポート'87」。入園者数の落ち込みに歯止めがかからない中、市水道局が策定した半田山植物園の改善プランだ。

若手職員6人が知恵を出し合い、園路の増設などを提案。バラ園に滝のように水が流れる「カスケード」を設けたり、岩を組み合わせた「ロックガーデン」を造ったりする案などは実現した。カスケードは小川のようなせせらぎを、ロックガーデンはヒマラヤに自生する青いケシなど珍しい植物の生育場所を創出した。

市民向けに手描きで見頃の花などを紹介するアイデアも採用され「半田山新聞」を〝創刊〟。季節ごとの植物をイラスト交じりで解説する月2回の「かわら版」として今も続き、来園者に配られている。

発芽に成功

90年には「都市緑化植物園」と位置付けられ、95年までに担当部署が市水道局から市建設局（現都市整備局）に移管。管理運営の実務は市公園協会に委託し、植物や造園の専門家のノウハウを生かすようになった。

同年、トルコの樹木園から譲り受けたレバノンスギの発芽成功はその一例。協会は専門チームを結成し、温室で室温を管理しながら育てた。メンバーだった協会緑化推進課の熊瀬徳輝さん（43）は「発芽した時は植物園の専門性向上に役立ったと感じ、うれしかった」と振り返る。

92年5月からは毎月1回、「四季と自然を楽しむ会」が開かれる。協会職員が園内を案内し、季節の草花の特徴などを説明する。毎回約50人が参加しており、常連の沼本克則さん（72）＝南区妹尾＝は「植物の名前の由来などを知ることができ、参加が楽しみ」と笑顔を見せる。

入園者数はピーク時の半数程度で推移しているが、奮闘を続ける同植物園。猪雅人園長（42）は「魅力をPRし、リピーターを増やしていきたい」と力を込める。

半田山物語

植物園50年のあゆみ

下 市民パワー

ボランティアが大活躍

「ここから斜面のツツジを撮ると、きれいに写る」「園路のカーブを構図に入れるのがお薦め」

カメラを手にした老若男女約20人に、2人の男性がアドバイスする。

4、5の両日、岡山市北区法界院の半田山植物園で開かれた「春の花まつり」の写真教室。同園にボランティア登録している笠原始さん(84)＝同津島中＝と大寺義美さん(80)＝東区西大寺松崎＝が講師を務めた。

「少しでも園の魅力を伝えたい」と笠原さん。参加した佐藤靖教さん(74)＝北区駅前町＝は「園内の撮影スポットを知ることができた。写真を撮りに通いたい」と話した。

教室や作品展

半田山植物園は2002年、ボランティア制度を導入。資格の有無は問わず、職員による面談を経て登録してもらう。現在、68人が登録しており、園内の草抜き、得意分野を生かした講習会の講師などをしている。

坪田清美さん(70)＝同谷万成＝らハーブ愛好家10人は月2回、ハーブ園の植え替え作業を担当する。来園者には積極的に声を掛け、ハーブの魅力を紹介。「ハーブに興味を持ってもらい、園のリピーターになってほしい」と期待する。

山野草の愛好者でつくる岡山山草会の金高正典会長(66)＝中区平井＝は2カ月に1回のペースで、山野草の寄せ植え教室を園内で開く。希少植物の植栽にも貢献しており、12年には県レッドデータブックで準絶滅危惧種に指定されているセツブンソウを植え、手入れを続けている。

園の入り口付近にある植物園会館では、ボランティアの人たちが加入する各種愛好団体の作品展がたびたび開かれ、にぎわいづくりにも寄与している。

夏井操学芸員(39)は「植物の管理やイベントの運営など、ボランティアの力は欠かせない」と感謝する。

「博物館相当」に

半田山植物園は3月、博物館法に基づき、県教委から「博物館相当施設」の認定を受けた。植物の収集、分類、研究と、その成果を市民に公開している取り組みが評価された。

博物館相当になったことで施設の信頼度が高まり、海外の植物園との種子交換が容易になったり、大学や他の博物館と研究で連携したりする効果が見込まれる。猪雅人園長(42)は「園の専門性、独自性を高めるきっかけにしたい」と力を込める。

専門性の向上には職員が研究に力を注ぐ必要があり、日々の管理業務やイベント運営でボランティアの役割が今以上に増してくる。

ボランティア制度の発足時から週2回、植え替えなどを手伝う中山健一さん(78)＝北区三野＝は「大好きな植物園が専門性を高め、魅力をアップさせるため、これからも協力していきたい」と話している。

原本洋輔が担当しました。

写真教室で参加者にアドバイスする大寺さん（右端）

山野草を使った寄せ植えを教える金高会長（右）